

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520065

研究課題名（和文） 板碑を素材とする思想史研究の新たな領域と方法の開拓

研究課題名（英文） A Search for a Academic Area and Method of Thought-History Studies Based on Itabi

研究代表者

佐藤 弘夫 (SATO HIROO)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30125570

研究成果の概要（和文）： 10世紀の後半から此土と隔絶した遠い彼岸世界の観念が膨張し、院政期に至ってこの世と断絶した死後に往生すべき他界浄土の観念として定着をみる。こうした世界観の転換を背景に、東国で大量に作成される板碑は、彼岸の仏の垂迹として人を浄土へと導く存在であると規定された。板碑のある空間は遥かなる彼岸の浄土への入口であり、そこへ足を運び、祈りをささげることによって、浄土への往生が可能になると信じられた。それは専修念仏とは異なるもう一つの、しかも主流としての中世の浄土信仰のあり方を示すものだった。

研究成果の概要（英文）： The concept of a faraway ideal world separated from this world expanded from the latter half of the 10th Century, resulting in settlement as a concept of paradise in “the other world” disconnected from “this world”. Accompanying such conversion of worldview, *Itabi* made in east Japans is stipulated as an existence that led people to paradise as Buddha’s manifestation (Suijaku). Since the “Pure Land of the other shore” was a far away world which could not be easily recognized by people, the transcendental characters abiding that Pure Land would, from time to time, appear in this world in visible shape like *Itabi*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：板碑、浄土信仰、本地垂迹、東国

1. 研究開始当初の背景

従来の思想史研究においては、仏教・儒教・神道・キリスト教といった個別ジャンルごとの、高度に理論化された思想体系や頂点的思想家を取り上げたものが圧倒的だった。そのため、ある時代の思想世界の全体像を描く際にも、そうした体系的思想の合算としてそれを行なおうとする試みが主流をなしていた。しかし、頂点的思想はそれぞれの時代において孤立した思想にほかならず、それを積み上げていくことによって、個々の思想に還元されない時代思潮を再現しうるかどうかについては疑問が残る。

私たちがまずなすべきことは、頂点思想や体系的思想を同時代の思想史的な文脈に位置づけていくための座標軸となるべき、当時の人々が共有する世界観・価値観の解明ではなからうか。だが前近代を対象とする場合、特に史料的な制約によって、民衆の世界観までも含む時代思潮を明らかにすることは困難であり、ほとんど試みられてこなかった。

2. 研究の目的

以上のごとき問題意識にもとづき、本研究においては、次の3点を目的としてかかげた。

(1) 日本の中世に焦点を絞り、大量に残存する「板碑」とよばれる当代固有の石碑群を素材として取り上げ、その碑文を分析することによって、当時の人々に共有されていたコスモロジーと死生観を抽出する。

(2) 前項で触れた中世人の共有する時代思潮を背景に置くことによって、従来の中世思想史研究の大部分を占めていた、いわゆる鎌倉新仏教・旧仏教、神道思想、本覚思想といった体系的思想に、新たな角度から意義と意味を見出すことを目指す。

(3) 本研究を日本中世という特定領域の研究にとどめることなく、金石文などの体系化されないテキストを用いていかに時代思潮を再構成していくかという、思想史一般の方法論の問題として深化させていく。

3. 研究の方法

(1) 現存する板碑のデータを網羅的に収集すると同時に、その銘文に関するデータベースを作成する。

(2) 研究の鍵となる主要な板碑については、実物についての実地調査を行うとともに、それを写真撮影して記録する。

(3) 板碑・金石文についてのこれまでの研究文献を、諸分野を横断する形で網羅的に集め、研究史の整理を行う。

(4) 収集した板碑について、その分析とコスモロジーの解明を本格的に進め、起請文研究の成果を援用しつつ、その考察を通じて当該時代の人々に共有されていたコスモロジーを抽出することを目指す。

(5) 板碑研究でえられたコスモロジーや死生観と対比しながら、いわゆる鎌倉新仏教・旧仏教、本覚思想といった体系的な仏教思想の分析を行い、新たな角度からその特質と意義を見出すことを目指す。

(6) 本研究を日本中世という一特定領域の研究に留めることなく、国内・国外の最先端の研究者と議論しながら、体系的な教理を説かないテキストからいかに思想や思潮を読み取っていくかという、思想史一般の方法論の問題として深化させていくことを目指す。

4. 研究成果

(1) 10世紀ごろから彼岸浄土の観念が肥大化し、他界のイメージが明確化されてくると、死後にいかにしてそこに往生できるかという問題が、人々にとって切実な課題となった。そうした状況の中で、仏が末法辺土の衆生を救済するためにこの世に示現した垂迹に結縁することが、往生へのもっとも確実な道であると信じられた。

(2) 板碑を含む塔婆もまた中世においては、遠い浄土の仏が濁悪のこの世に住む悪人を救済するために、具体的な姿を現した（垂迹した）存在だった。それらは衆生を彼岸の浄土に誘うことを究極の目的としており、その所在地は彼岸世界への通路にほかならなかった。したがって、たとえ特定個人のために建立された塔婆であっても、そこは基本的にだれもが結縁可能な聖地だった。

(3) 従来中世の浄土信仰というと、ただちに法然、親鸞の専修念仏を想起するが、中世の浄土信仰の主流は板碑などの垂迹に結縁するというタイプのものだった。法然らの専修念仏は、垂迹を媒介とする浄土信仰の隆盛と

いう時代背景を踏まえて、はじめてその意義がみえてくるものと考えられる。

垂迹という媒介者を拝して、信仰者が直接彼岸の阿弥陀に向き合うことを重視する法然、親鸞らの信仰は、垂迹の役割を不可欠とみなす既存の浄土信仰に対する根源的な批判を内包するものだった。

(4) 垂迹への結縁が遊行なのは生者だけではなかった。12世紀中葉から聖地への納骨信仰が盛んになり、中世墓地が形成されていくが、その基本理念は垂迹への結縁だった。納骨信仰の普及を通じて、浄土往生が実現するまでは靈魂が骨に留まるという観念が定着した。

(5) そうした死にかかわる観念がもう一度決定的な変容をみせるのは、14・15世紀のことだった。彼岸世界が衰退するなかで行き場を失った死者の靈魂は、遺骨を依り代として死後も永遠にこの世に留まることになった。骨と靈魂との結びつきは、以前よりも遥かに強固で永続的なものとなった。成仏とは草葉の陰での安らかな眠りであり、それを保証するのが血縁者と僧侶による定期的な供養だった。

(6) かくして、靈魂を彼岸に送り届ける装置としての供養塔は歴史的な使命を終えた。代わって、この世での永眠のシンボルとしての墓標が、石塔の主役の座に就くことになるのである。

(7) 板碑を研究素材とすることによって、従来まったく知られていなかった、中世人が共有していた精神世界と救済の構造が明らかになった。

(8) 板碑は、専ら日本史や歴史考古学の研究者が基礎資料として用いてきたものであり、そこでは板碑そのものを研究することが目的化されて、そこに時代思潮やコスモロジーを読み取ろうとする試みは、従来皆無といってもよい状況であった。それに対し、本研究で試みられた金石文-板碑を素材とする本格的な思想史的研究の提唱とその実践は、まったく他に類を見ない独創的なものであり、資料論の上からも方法論の問題としても、研究界に大きな論議を呼び起こした。

また板碑から当時の人々の精神世界を読み取ろうとする本研究の試みは、歴史考古学の分野の研究者との議論や共同研究として実を結んだ。

こうした共同研究は、今後もさらに活発に継続・発展していく予定である。

(9) 今日、日本中世思想史研究は世界的なレベルで、かつての鎌倉仏教を中心とするものから、神仏習合といった混とんとした宗教世界に目を向けようとする方向に進みつつある。しかし、神仏や聖人・怨霊・疫病神・死者などが混在する思想世界の全体像を、いかなる素材を用いてどのように解明するかについては、まだ試行錯誤が続いている状況である。

そうした中で、板碑をはじめとする幅広い資料を用いて、独自の立場から中世の思想世界を再現しようと試みた本研究は、国内外で幅広い分野の研究者から注目を集めた。その結果、本研究成果は、アメリカ・イギリス・イタリア・ドイツなどで開催された国際学会・国際シンポジウムにおいて、招待講演・基調講演として発表されることになった。また、著書(『使者のゆくえ』韓国語訳)および関連論文が外国語訳されるなど、国内外に大きなインパクトを与えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 佐藤弘夫、「彼岸に通う音」、『文学』、査読無、2010年11・12月号、44-56、2010。
- ② 佐藤弘夫、「西行における「山」と救済」、『西行学』、査読無、1号、71-82、2010。
- ③ 佐藤弘夫、「王都奈良の原像」、『ならじあ2 東アジア共同体』、査読無、丸善、442-459、2010。
- ④ 佐藤弘夫、「霊場と巡礼」、『兵たちの極楽浄土』、査読無、高志書院、184-205、2010。
- ⑤ 佐藤弘夫、「変貌する日本仏教観」、『新アジア仏教史12』、査読無、佼成出版社、336-375、2010。
- ⑥ 佐藤弘夫、「「蒙古の調伏者」日蓮像の形成」、『仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書』、査読無、37号、11-16、2010。
- ⑦ 佐藤弘夫、「死者は山に棲むか—「日本人」の靈魂観・再考」、『アジア遊学』、査読無、124号、13-19、2009。
- ⑧ 佐藤弘夫、「アラヒトガミの系譜」、『季刊日本思想史学』、査読無、73号、3-21、2008。
- ⑨ 佐藤弘夫、「板碑を通してみる中世東国の宗教世界」、『日本仏教総合研究』、査読有、6号、17-30、2008。

[学会発表] (計7件)

- ① Sato Hiroo、*Combinatory Practices in Japan: Rethinking Religious Syncretism*、国際シンポジウム、2011/2/24、ロンドン大学、UK。
- ② Sato Hiroo、*Transition of the View of*

Mountains in Japan、International Conference on Arts and Humanities、2011/1/9、ハワイ大学、USA。

③佐藤弘夫、「ヒトガミの誕生」宗教学会大会、2009/9/12、京都大学。

④佐藤弘夫、「西行における「山」と救済」、第一回西行学会大会シンポジウム、2009/8/30、國學院大學。

⑤ Sato Hiroo、*Transition of View of Mountains in Japa*、国際シンポジウム・Shugendo: The History and Culture of a Japanese Religion、2008/4/25、コロンビア大学、USA。

⑥ Sato Hiroo、*Tenno Ideology and Discourse*、EJJS Conference、2008/9/20、サレルモ大学、イタリア。

⑦ Sato Hiroo、*The Emergence of Shinkoku (Gods' Land) Ideology*、国際シンポジウム:Religiou 'Nativism' in Buddhist Societies、2008/9/12、デュッセルドルフ、ドイツ。

〔図書〕(計2件)

①佐藤弘夫、『日本中世の国家と仏教』、歴史文化セレクション、吉川弘文館、281頁、2010。

②佐藤弘夫、『死者のゆくえ』、249頁、岩田書院、2008。

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/shisoshi/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 弘夫 (Sato Hiroo)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 30125570

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: